# Lorenz96モデルのEnKFと カオス同期の間欠性

MACSプログラム

SG2020-1:データ同化の数理と応用:理論モデルとデータをつなぐデータサイエンス

京都大学理学部地球物理学系統測地学研究室4回生 大畠敬就

#### 目的

- ・ローカライズ有のEnKFを実装できるようになる
- ・PO法とLETKFの違いについて理解する
- ・観測点数がOn-Off-intermittency に与える影響について考える

#### 実験内容

- ・Lorenz96モデルで、PO法 (localization 有り)、およびLETKFを実装した。
- ・InflationとLocalizationを変えたときの、真値からの誤差のRMS、およびアンサンブルスプレッドを求めた。
- ・いくつかの結果についてはRMSの時間発展の図を描き、On-Off-Intermittency が生じていることを確認した。
- ・最後にPO法とLETKFの違いや、観測点数が与える影響について考察した。

#### データ同化

## 口初期値の作成

$$\mathcal{L}_{init} = (F, F)$$
  $F = 8.0 (91)$ 

### 回 forward 計算

Lovenz 96 = [L + (x,t) = 
$$\frac{dx_i}{dt} = (x_{i+1} - x_{i-2})x_{i-1} - x_i + F$$

$$RK45$$
  $k_1 = f(x,t)$ 

$$dt = 0.001 k_2 = f(x + k_1 \frac{dt}{2}, t + \frac{dt}{2})$$

$$1H = 0.2 k_3 = f(x + k_2 \frac{dt}{2}, t + \frac{dt}{2})$$

$$k_4 = f(x + k_0 dt, t + dt)$$

$$\chi(t+dt) = \chi(t) + (k_1 + 2k_2 + 2k_3 + k_4) \frac{dt}{6}$$

#### 3 1年間 spin up

Lorenz 96 
$$\mp$$
 FIL  $f(x,t) = \frac{d\lambda_i}{dt} = (\chi_{i+1} - \chi_{i-2})\chi_{i-1} - \chi_i + F$ 

$$RK45 \qquad \qquad k_1 = f(\lambda, t)$$

$$Kz = f\left(\chi + \frac{k_1}{2}dt, t + \frac{dt}{2}\right)$$

$$dt = 0.001$$
 $K_3 = f(2t + \frac{K_2}{2}dt, t + \frac{dt}{2})$ 

$$11 = 0.2$$

$$K_4 = f(X + K_3 dt, t + dt)$$

$$x(t+dt) = x(t) + (k_1 + 2k_2 + 2k_3 + k_4) \frac{dt}{6}$$

#### 方法 PO法 Localization 有り

$$\overline{\chi} = \frac{1}{10} \sum_{i=1}^{10} \chi(ii)$$

ル:アンサンブル番号 1≦ル≦10 す:格子点番号 1≤→≤40

り:現在同化中の智見則点 がある格子点番号 151540

## |2] 智見則点ごとに同化(観測点ことにループ)

- ① R=1,0 (幅則誤差)
- ② モデル言葉差失分青文行列に相当するへりトルPをすめる。

$$\overline{\chi}^{f} = \frac{1}{10} \sum_{i=1}^{10} \chi_{i}^{f(i)} \chi_{i}^{f(i)} \\
P = \frac{1}{10-1} \sum_{i=1}^{10} (\chi_{i}^{f(i)}) \overline{\chi}^{f(i)} (\chi_{i}^{f(i)}) \overline{\chi}^{f(i)}$$

Po, Xfi):現在同化中の観測点が存在的格子点での値

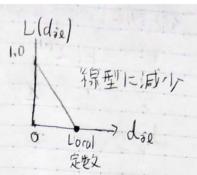
③カルマンケインドベクトルの計算

$$K = \frac{P}{R + R}$$

(4) Localization.

dal:現在同化中の観測点の位置 LY,格子点すまでの 足屑色

L(dae): Localization の割后 0 = L (die) = 1



(5) イノベーション

な:現在同化中の観測点での観測値

N(0,1):智見月り誤差に相当る正規制数を足す。

⑥次の類別点のループへ 26f(i) = 26a(i)

引観測点ごとの同化ループ終3、次のforward計算へ 2(11) = 2(0(1)

#### 方法 LETKF

## □ 智見、思り点でのモデルの平均がのずれ Yoztめる。 1: アンサンブル番号は15km

(Nobs X 10 47 51)

$$\widetilde{\mathcal{M}} = \frac{1}{10} \sum_{\lambda=1}^{10} \chi(\lambda)$$

$$\overline{\chi} = \frac{1}{10} \sum_{i=1}^{10} \chi(i) \qquad \chi_{i} = \chi_{i} - \chi_{i} \qquad (40 \times 10 \% 5)$$

3 格子点でとにループ。して同化 す:格子点番号

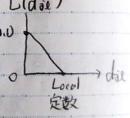
$$\bigcirc R^{-1} = \frac{1}{h_0} I + Localization$$

R-1=10工: 智見則誤差の逆数 10を 対角成分にもフ、(Nobs X Nobs)対角行列

dail:現在同化中の格子点文Y, RTの(U,L)成分の観測点しまでの距离

L(dae): Localization の割后

0 = L (doe) = 1



Po = (10-1). 1 I + CYb (10×1047511)

は: 化71-ジン I: 単位行列 (10×10)

③ 固有值分角平 Pat = V/IVT

V:固有べ7k1Lの行列 1:固有値の対角行列

E Pa, Wan計算

Pa = (10-1) 1 I+ CYB 1 = V 1-1 VT Wa = [(10-1) Pa] = - 10-1 V 1-2 VT

⑤ 平均値のイバーション 十二

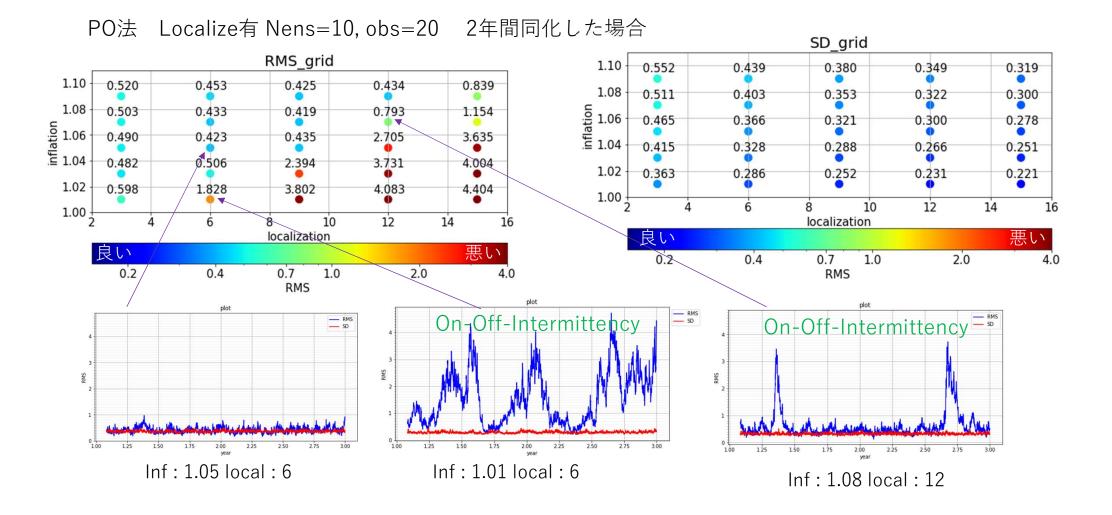
Wa=PaC(40-40) w: 看見具り值

⑥名アレサレブルのずれのイノベーション

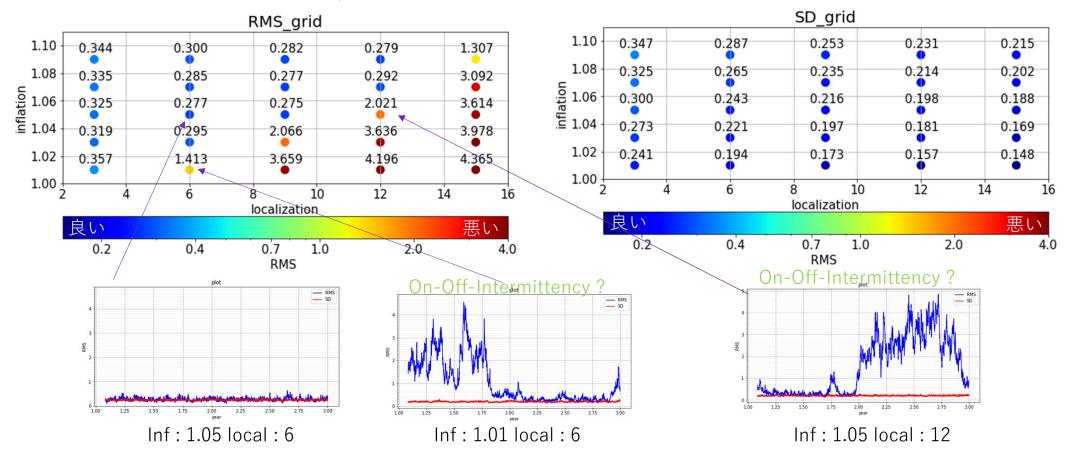
 $W_{\alpha} = W_{\alpha}^{ij} + \overline{W_{\alpha}}$  (10×104551)

の新アンサンブル作成

$$X_{3}^{a(i)} = X_{2} + \sum_{P=1}^{10} X_{p}^{b}(z, P) Wa(P, i)$$

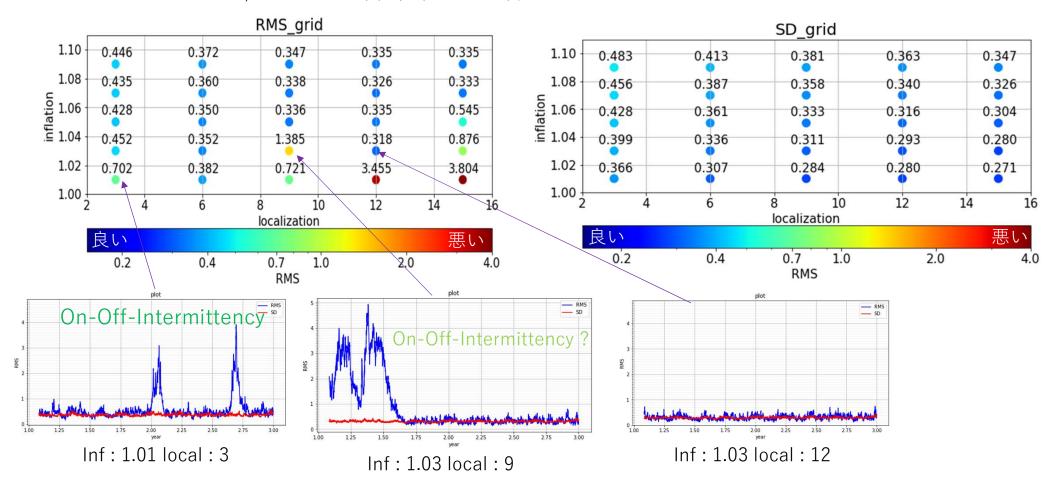


PO法 Localize有 Nens=10, obs=40 2年間同化した場合



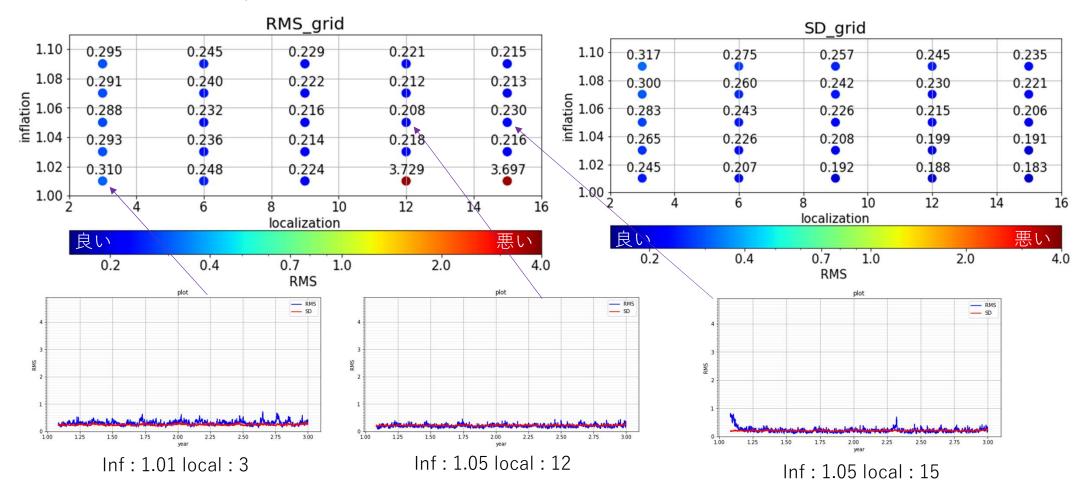
観測点数20点の時よりも全体的にRMS、アンサンブルスプレッドがともに小さくなった。

#### LETKF Nens=10, obs=20 2年間同化した場合



観測点数20点のPO法と比べて、アンサンブルスプレッドはあまり変わらないが、RMSは小さくなった。

#### LETKF Nens=10, obs=40 2年間同化した場合



観測点数40点のPO法と比べて、アンサンブルスプレッドはあまり変わらないが、RMSは小さくなった。 観測点数20点の時よりも全体的にRMS、アンサンブルスプレッドがともに小さくなった。

Localize有 Nens=10, obs=20 20年間同化した場合 PO法 RMS\_grid SD grid 1.06 1.06 1.05 1.05 0.332 0.318 0.307 0.298 0.292 2.156 3.111 inflation 1.04 0.479 0.498 1.226 inflation 1.04 0.313 0.302 0.293 0.277 0.284 0.921 1.753 2.292 3.529 3.180 1.03 1.03 1.02 <del>|</del>-1.02 6 10 11 12 11 10 12 localization localization 良い 悪い 0.7 1.0 0.2 0.4 2.0 0.2 0.4 0.7 1.0 2.0 4.0 **RMS RMS** On-Off-Intermittency On-Off-Intermittency? On-Off-Intermittency? On-Off-Intermittency? On-Off-Intermittency Inf: 1.04 local: 9 Inf: 1.04 local: 10 Inf: 1.04 local: 8 Inf: 1.04 local: 7 Inf: 1.04 local: 11 On-Off-Intermittency? On-Off-Intermittency On-Off-Intermittency On-Off-Intermittency

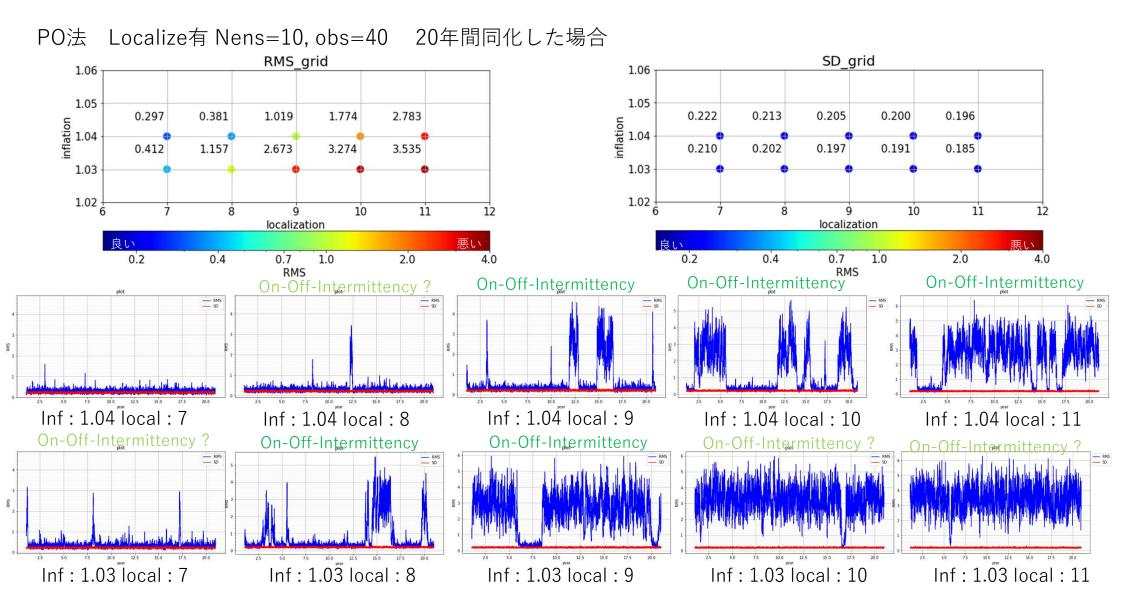
Inf: 1.03 local: 9

Inf: 1.03 local: 10

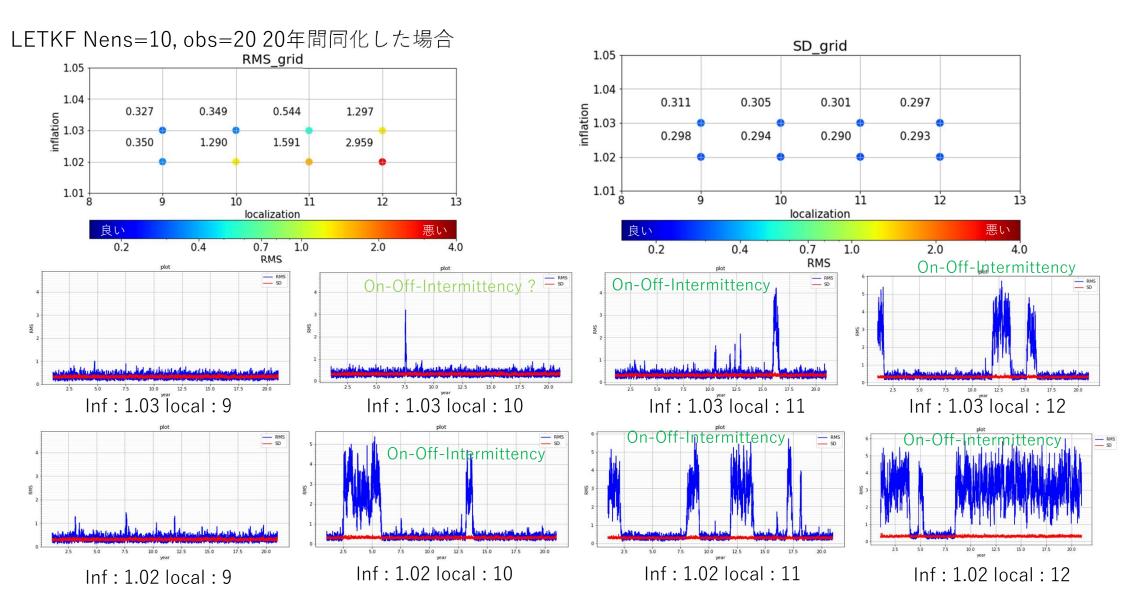
Inf: 1.03 local: 11

Inf: 1.03 local: 8

Inf: 1.03 local: 7

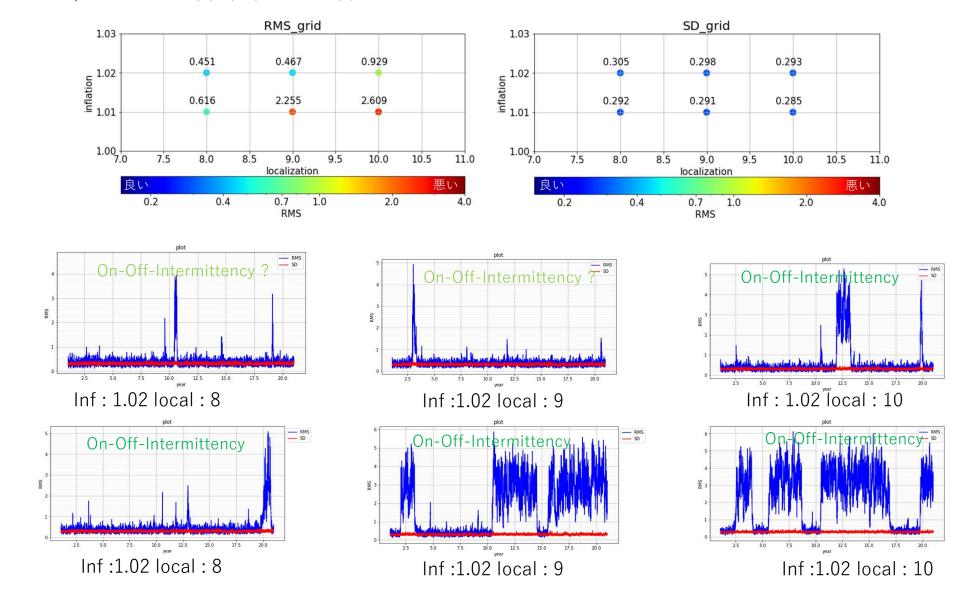


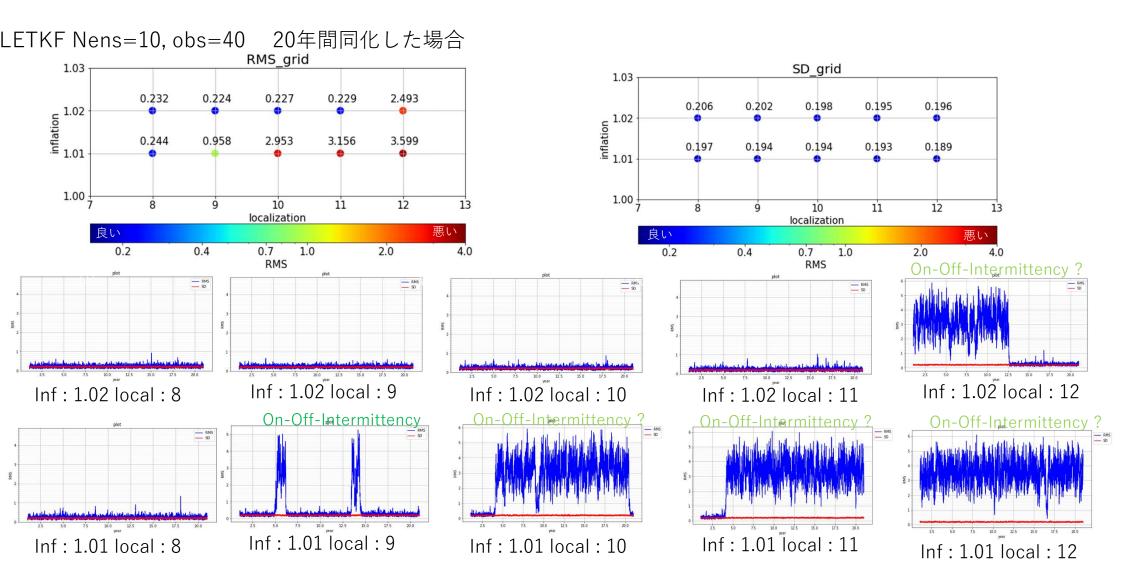
観測点数20点の時よりも、onとoffの切り替えの頻度が下がっている



PO法の時よりも、OnとOffの切り替えの頻度が少ない

#### LETKF Nens=10, obs=20 20年間同化した場合





PO法よりもOnとOffの切り替えの頻度が少ない。 観測点数20点の時よりも、On-Off-Intermittencyが生じにくい。

#### まとめと考察

- ・RMS ≤ アンサンブルスプレッドの場合、 local が大きくなり、inflation が小さくなるほど、RMSは小さくなった。
  - →local を大きくすると、より多くの観測の情報を取り込めるから。
  - →inflation を大きくすると、アンサンブルスプレッドが大きくなってしまうから。
- ・local を大きくしすぎたり、inflationを小さくしすぎると、 RMS>アンサンブルスプレッドとなり、発散した。
  - →local を大きくしすぎると、遠くの観測との関係ない相関を取りこんでしまうから。
  - →inflationを小さくしすぎると、アンサンブルスプレッドが小さくなりすぎ、 観測データを取り込まなくなってしまうから。
- ・RMSが 0.5 ≤ RMS ≤ 3.0 ぐらいの時、On-Off-Intermittencyが生じた。
- ・PO法とLETKFで、アンサンブルスプレッドはあまり変わらなかった。
- ・PO法よりもLETKFのほうが、RMSが小さくなった。
- ・PO法よりもLETKFのほうが、OnとOffの切り替えの頻度が少なくなった。 →PO法では同化のたびに観測誤差を乱数として与えるから。
- ・観測点数が増えると、OnとOffの切り替えの頻度が少なくなった。 →不確実性が減るから。

#### 参考 · 参照文献

Brian R. Hunt, Eric J. Kostelich, Istvan Szunyogh,
Efficient data assimilation for spatiotemporal chaos: A local ensemble transform Kalman filter,
Physica D: Nonlinear Phenomena,
Volume 230, Issues 1–2,2007,Pages 112-126,ISSN 0167-2789,
<a href="https://doi.org/10.1016/j.physd.2006.11.008">https://doi.org/10.1016/j.physd.2006.11.008</a>.

Edward N. Lorenz 1 and Kerry A. Emanuel 1
Optimal Sites for Supplementary Weather Observations: Simulation with a Small Model
01 Feb 1998 Journal of the Atmospheric Sciences Volume 55: Issue 3 Pages 399–414
https://doi.org/10.1175/1520-0469(1998)055%3C0399:OSFSWO%3E2.0.CO;2

編著:樋口 知之 著:上野 玄太 中野 慎也 中村 和幸 吉田 亮 シリーズ 予測と発見の科学 データ同化入門 一次世代のシミュレーション技術ー 朝倉書店

Michael K. Tippett, Jeffrey L. Anderson, Craig H. Bishop, Thomas M. Hamill, Jeffrey, S. Whitaker Ensemble squareroot filters
January 30, 2002
<a href="https://iri.columbia.edu/~tippett/pubs/srf">https://iri.columbia.edu/~tippett/pubs/srf</a> submit1.pdf

#### 三好建正

アンサンブル・カルマンフィルタ ーデータ同化とアンサンブル予報の接点ー 天気 2004年

https://www.metsoc.jp/tenki/pdf/2005/2005\_02\_0093.pdf